

五条川流域における「下呂石」の分布について

飴 谷 一

I

本稿は、「尾張平野」の中央をほぼ南北に流れる五条川の流域に分布する弥生時代の遺跡から出土する「下呂石」の分布状況を整理し、その動き方（流通）について概観する。

一般に、「下呂石」とよばれている石は、岐阜県益田郡下呂町の東部に位置する湯ヶ峰から産出される「ガラス質黒雲母石英安山岩（湯ヶ峰デイサイト）」のうち、打製石器の石材として使われている岩石の俗称である。⁽¹⁾

II

今日知られている「下呂石」の分布範囲は、飛驒地方を中心に、長野県の一部、美濃地方、伊勢湾沿岸と、南北に伸びて広がる。それはあたかも、西の奈良県二上山産のサヌカイト分布圏、東の長野県和田峠産の黒曜石分布圏の間の空白を埋めているかのようである。⁽²⁾

ところで、「下呂石」がこれらの地方の石器（打製石器）の石材として確実に認識されだしたのは昭和30年代後半からである。それ以前は、下呂を中心とした飛驒地方に特有な石器用石材であるという漠然とした認識はされていたものの、多くの場合は「サヌカイト」と鑑定され、畿内の二上山産のそれが搬入されたと理解されていた。⁽³⁾

また「下呂石」の産出地が湯ヶ峰であると同定された後も、各遺跡発掘調査報告書での名称の統一がなされず（例えば「下呂石」が黒雲母安山岩であったり、ハリ質安山岩であったりした）、石器の石材を知る上で混乱を招いていた。このようなことが起きた要因の1つには、発掘調査担当者の石器用石材についての認識不足があったことは否めない。このような状況を顧みて、最近では石原哲弥氏を中心とする高山考古学研究会により、「下呂石」という名称の統一が呼びかけられている。⁽⁴⁾また、蛍光X線分析による石器の石材の産地同定も近年盛んになり、「下呂石」に関してもデータを蓄積しつつある。⁽⁵⁾

さて、本稿でとり上げる「下呂石」の動き（流通）に関する研究はあまり進んでいない。これは、石器用石材としての「下呂石」に関して地域間の共通認識がようやく生まれたことを考慮すればやむを得ない点ではある。一方では、最近石原哲弥氏が、飛驒地方を中心に、旧石器時代から弥生時代にかけての各遺跡から出土する石器用石材である「下呂石」と他の石材との割合を出し、それらの頻度による地域分布の相違、ひいては「下呂石」に

よる文化圏をも導き出そうと精力的な研究をすすめており、「下呂石」の研究で他をリードしている。⁽⁶⁾しかし、各時代毎の遺跡からの出土状況(どのような形で石器用石材である「下呂石」が出土したか)、明確な時代区分をした上での分布の相違については未整理のようである。今後の成果が期待される。

他方、石黒立人氏が「弥生時代的美濃地方とその特質」という論文の中で、遺跡の分布(配置)を知る手掛りとして、湯ヶ峰から美濃・尾張地方に至る搬送ルートの想定をしており興味深い。⁽⁷⁾

尾張地方については、これらに類する研究はなされていないようである。

「下呂石」に関しては、自然化学分野の成果とも相まって、この地方の研究者の間にも共通した認識が、徐々にではあるが、広がりつつある。それと共にその分布範囲も明らかにされてきている。研究材料がようやく揃ってきた感がある。

III

特定の地域でしか産出されない「石」が、そこから遠く離れた幾多の遺跡から出土することは、考古学ではままよくあることであり、その「石」が移動したものとして解される。さらにそれが人工遺物artifactとして出土するならば、「道具として利用するための材料」として各遺跡(集落)へ運びこまれたと考えられる。

つまり、幾多の集落で「ある道具(この場合の人工遺物)」を生活の中にとり入れた場合、それにかかわる「材料(例えば「下呂石」)」は、それを利用する集落間で共有されるべき「価値」となり、それに対する人々の共通した価値意識のもとで、「流通」という人間の意図的行為による「移動」という現象が起きたと理解されるのである。ところが「流通」は「価値の交換」を前提とする行為であるので、それが集落間相互の政治的力か、経済的力か、宗教的力か、いずれの力関係により行なわれたかを考慮しなければならない。

M. サーリンズによれば、「交換」のパターンとしては、「相互性」と「再分配」の二つに大別されるという。⁽⁸⁾

考古学的にここまで検証することは容易ではない。しかし考古学者が「ものの移動」を考える場合常に「 $A \rightleftharpoons B$ 」の可逆的な移動の可能性を念頭に置かなければならない。そのことは、それぞれの環境状況により遺存状態の良し悪しが決定される出土遺物だけでは、「 $A \rightarrow B$ 」という一方的な図式のみで集落間関係を導き出す恐れがあり、誤った社会構造をつくり出しかねないからである。

IV

五条川は、尾張平野の中央部をほぼ南北に流れ、庄内川に合流する河川である。現在は犬山市の郷瀬川と入鹿池を源としているが、かつては木曽川の大きな支流の一つとして存在していたらしい。⁽⁹⁾これを仮に「旧五条川」とよぶ。

旧五条川流域は自然堤防が良く発達しており、その上に多くの弥生時代の遺跡が分布している。しかし実際に調査された遺跡は少なく、しかも小規模な面積で調査を行なった例が多い。そのため、出土土器により遺跡の存続期間は追えるものの、遺跡の規模や様相が不明瞭であるものがほとんどで、遺跡の姿を知り得ることが可能なのは朝日遺跡ぐらいである。従って石器の出土の仕方（例えば石器製作の場を思わせる石器・石核・多量の石屑が集中しているような場合）がわかる遺跡もないのが実情である。このような点を考慮して①遺跡の立地条件、②「下呂石」の出土状況、③弥生時代の中でも「諸生産物・人間・情報が広範囲かつ活発に移動した⁽¹⁰⁾」中期に限定して遺跡のまとまりを押さえる。という3つの条件を設定し、旧五条川水系での「下呂石」の動きを把握していく。

「もの」が移動する、特に遠距離にわたる場合には、必ず拠点的中継地（集落）を要するが、旧五条川流域ではそのような拠点的な集落は、朝日遺跡以外では、確認されてはいない。一方、尾張平野では弥生時代前期後葉（西志賀期）に散発的なまとまりをみせていた遺跡が、中期前葉（朝日期）になると主要河川沿いにさらに小さなまとまりを形成し、中期中葉から後葉（貝田町期から高蔵期）にかけて、さほど大きな動態もなく継続していた、ということが遺跡の分布からよみとることができる。⁽¹¹⁾（第2図）

このようにしてみると旧五条川流域には大口町と岩倉市付近に遺跡のまとまりがみられる。しかもそれを形成する遺跡はいずれも同じ時期に属している。これらが本来は1つの遺跡であったかどうかはわからないが、この地方の代表的拠点集落である朝日遺跡から北へ五条川沿いに辿っていくと約5～6kmの間隔でこれらのまとまりが分布する。この距離は、「農耕民が日常的に行動する範囲であり、これ以上広がると経済活動が低下する」という地理学での成果があり⁽¹²⁾、また酒井龍一氏も「畿内の拠点集落が分布する際の一般的間隔と仮定」している⁽¹³⁾。この考え方にのっとり、五条川流域に分布する遺跡のまとまり（「群」とよぶ）を「下呂石」の移動（流通）に関しての拠点的中継地点（集落）として考えるものとする。

以上の点から、旧五条川流域の遺跡（群）を眺めると、北から、上野遺跡－大口町遺跡群（西浦遺跡、東樋田遺跡等）－岩倉市遺跡群（ノンベ遺跡、曾野遺跡等）－朝日遺跡とつながる。さらに上野遺跡の北、木曽川を辿った美濃加茂市には、「下呂石」の石核・石屑

・石器の多量の出土をみた牧野小山遺跡があり、また朝日遺跡の西には、「下呂石」の円礫が多く出土した阿弥陀寺遺跡がある。

上野遺跡では「下呂石」による打製石器の他、石核・石屑が多く見い出されている。円礫が広がる木曽川河川敷にも近く、遺跡⁽¹⁴⁾から出土する石核、或いは遠く朝日遺跡や阿弥陀寺遺跡などでみられる円礫などもここを主要な中継地点として運ばれた可能性もある。

大口町、岩倉市の各遺跡群では、打製石器の多くが「下呂石」を使用していることから、ここでも多くの「下呂石」が石材として搬入されたと察するに難くない。

朝日遺跡では、周知の通り「下呂石」が多量に出土しており、打製石器の石材の6割を占めている。また「下呂石」の礫（多くは円礫）も多数出土している。

大口・岩倉地域の詳細は不明だが、牧野小山・上野・朝日・阿弥陀寺の各遺跡では多量の「下呂石」による（人工）遺物がみられることから、たくさんの「下呂石」が搬入されたに違いない。それは、牧野小山遺跡は木曽川と飛驒川の合流地点、上野遺跡は木曽川と旧五条川の合流地点で尾張平野の北の入口であり、朝日遺跡は、推察ではあるが、東の名古屋台地方面と西の伊勢方面との分岐点にあたるという、地理的、社会的要因があったからだと考えられる。江戸時代の主要街道や今日の商品流通の流れをみても、このような地点が1つの拠点もしくは重要な中継地点となっている場合が多い。「下呂石」がこのような中心的存在の遺跡で集約、ストックされていた可能性は十分にありうる。

尾張平野でみられる「下呂石」は、産出地湯ヶ峰より50～100 kmも離れて出土したものである。にもかかわらず、その出土率は非常に高い。⁽¹⁵⁾ 湯ヶ峰付近の遺跡からこの地域の遺跡に至るまでの「下呂石」の出土率を比べていくと、原産地から緩かに漸減するカーブを描くことができる。C.レンフリーューはこのようにあらわされる流通（交易）形態をDown-the-lineとよんでいる。⁽¹⁶⁾

しかし、朝日遺跡や阿弥陀寺遺跡からは円礫となった「下呂石」が多く出土しているので、原産地（湯ヶ峰）より直接Down-the-lineの方法でもちこまれたのではなく、恐らく、木曽川中流域に広く分布する河川敷を「2次的産地」として利用し、そこから大集落へ搬入された、と考えられる。その場合でも、この地域では「下呂石」が突然多く見られる遺跡はないので、「2次的産地」に近接した集落からDown-the-lineの方法で石材が動き、一旦大集落に集約された後、周辺の小集落へ、製品としてか、石材としてかは不明だが、分配されたと考えられる。

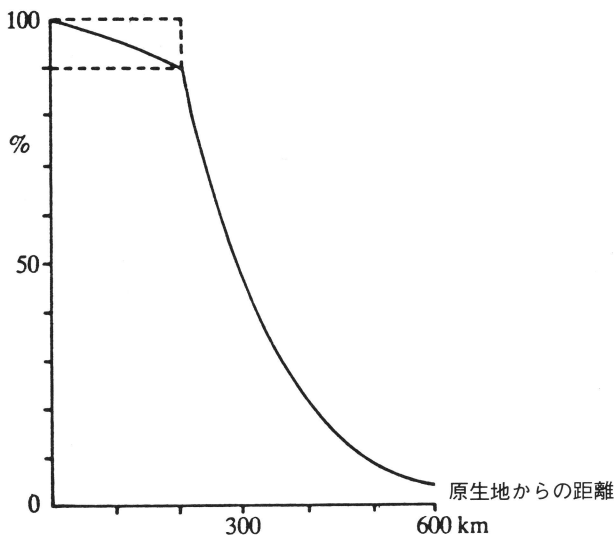
V

以上を要約すると

- 1 「下呂石」は尾張平野でも打製石器の石材として普遍的に利用された
- 2 「下呂石」の移動は拠点的中継集落を介して行なわれた
- 3 「下呂石」は1つの大拠点集落に集約されることなく、各大拠点集落にほぼ均等に搬入された

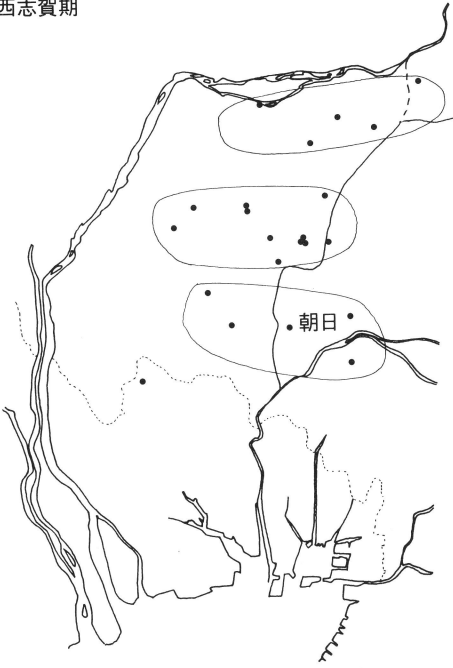
注

- (1) 岩田 修 1982 「下呂町に分布する湯ヶ峰デイサイト」 『岐阜県地学教育』18
- (2) 岐阜県立博物館 1987 『濃飛の弥生時代』5頁参照
- (3) 石原哲弥氏論文(後掲)参考
- (4) 石原哲弥 1981 「下呂石を原材した石器の研究」『飛騨史学』第2巻
- (5) 藁科哲男・東村武信・鎌木義昌 1978 「蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定Ⅳ」『考古学と自然科学』11
- (6) 石原哲弥 前掲
1984 「飛騨の下呂石」『歴史手帳』11巻1号
- (7) 石黒立人 1988 「弥生時代の美濃地方とその特質」『マージナル』8 愛知考古学談話会
- (8) M. サーリンズ 1983 『石器時代の経済学』(山内利訳) 法政大学出版
- (9) 建設省中部地方建設局・庄内川工事事務所 1982 『庄内川流域史』
- (10) 酒井龍一 1984 「弥生時代中期・畿内社会構成とセトルメントシステム」『文化財学報』3
- (11) 愛知考古学談話会定例会('88, 10)にて北村和宏氏が濃尾平野の弥生時代遺跡の分布状況の変化について発表したものを利用させていただいた。
- (12) 赤沢 威 1975 「先史学における解釈—現在でもって過去を説明する」『旧石器文化の研究』5
- (13) 酒井龍一 前掲
- (14) 筆者が上野遺跡周辺を歩き回った知見による。
- (15) 文献(2)参照
- (16) Renfrew, C. 1975 『Trade as action at a distance : questions of integration and communication, *Ancient Civilization and Trade*』

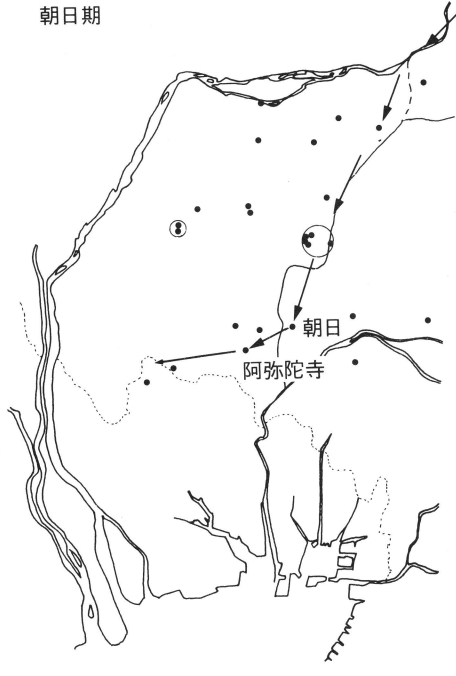


第1図 Down-the-lineのモデル(文献(16)参照)

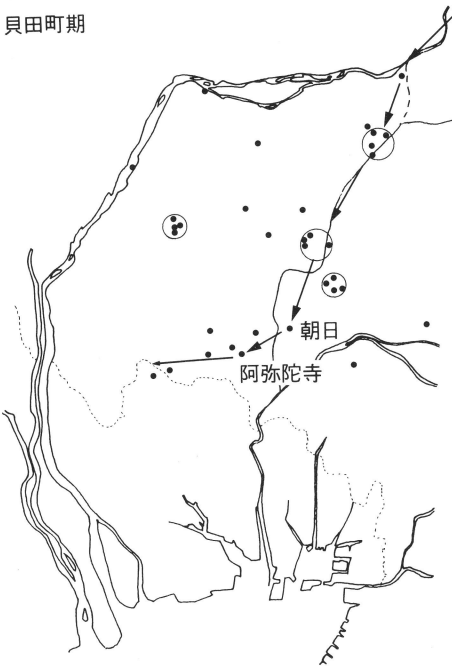
西志賀期



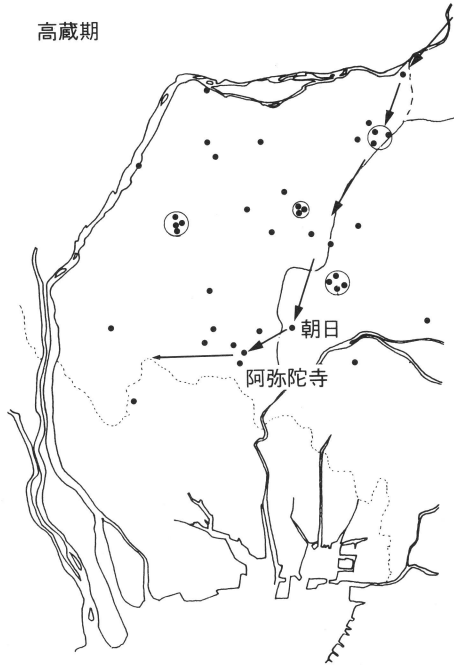
朝日期



貝田町期



高蔵期



第2図 尾張平野弥生時代遺跡の時期別分布図（北村和宏の図に加筆）
 〈矢印は「下呂石」の推定移動ルート〉